

で、さらにまた具体的な歩みとして展開することを、心から期待する所以である。

7) 重度・重症心身障害児への私なりのアプローチも、今年でコロニー実習は18回目を重ね、MR療育も17年目に入った。それらの総決算をも含めて、この年昭和62年度の科学研究費を得たのを機会に、大規模な交流の集いが企画されている。9月26・27両日、「心身障害児療育の明日をめざして」と題する交流シンポジウム、交流運動会、交流懇親会はその一環である。

現時点における総括としては、東海心理学会第36回静岡大会に報告したのものにもとづき、本紀要にも、「重度・重複障害幼児の集団療育(10)——子どもとの全人的かかわりを求めて——」と題する論稿を、後藤秀爾らとともにまとめて提起した。

8) 例年の学生相談研究会議は、この年も新年早々、1月8・9・10の三日間にわたって、香川大学の担当、五色台で開催された。昭和43年宮島で最初の集まりをもって以来、ちょうど20年目になる。発足以来、ほとんど毎年参加しつつけたもの一人として、教育制度の時代に伴う変革に即応した、キャンパスにおける新しい学生相談の在り方を模索してのこれからの展開に、今後いよいよ多くの期待を寄せたいところである。

この会議終えてあと、会員のひとりから提案された、教官エンカウンター・グループの再開に共鳴し、この7

月9日から12日まで、信州富士見高原で10数名の仲間と共に、改めて出会いの場を得たことも、かねがねこの種の企画の中断をわびしく思っていた私にとって、この年心に残る忘れがたい体験であった。

9) 名古屋大学を来年3月、停年でいよいよ退官することになる。昭和26年、医学部精神医学教室に入局して以来、教養部での14年を中にはさんで、教育学部を中心とする、私自身の37年間にわたる名古屋大学での在職の日々をふり返って、感懐またひとしおのものがある。

よき先輩、同僚、学生諸君にめぐまれて、ほんとうに充足した名古屋大学での生活であった。1年1年忘れがたい思い出にみちている。とりわけいわゆる大学闘争のあと、大学の民主化をめざしての変革に、私なりにかなりの情熱を傾けた中で、その一端として、教育心理学教室における教官のその年ごと、一年間の研究状況報告を、その年度の紀要に寄せることを相互の義務づけとして申しあわせて、それを厳しい自己課題としてきた私は、「この一年の歩み」が、まさしく年度ごとの一里塚でもあった。昭和45年以来、18回つづけて寄せてきた、この「歩み」の集積が、私にとっては名古屋大学にのこす、唯一の遺産ともなる。お世話になった多くの各位に、心からなる謝意を表して、私にとって最後の「この一年の歩み」の筆を擱くことにしたい。

(昭和62年8月18日)

## 研究経過報告——'86年秋～'87年夏——

小 嶋 秀 夫

この1年の内になんらかの形で成果の出た新しい活動から報告して行く。まず、日本教育心理学会第28回総会(1986年10月、福岡)でのシンポジウム、「教育心理学における“一人の被験者”(N=1)アプローチと“多数者=統計的”アプローチをめぐる」(企画・司会：山内光哉)において、「発達研究におけるシングル・ケース研究をめぐる」というテーマで提案を行った(教育心理学年報, 1987, 26, 10-11. [抄録])。

次に、第88回日本医史学会総会(1987年4月、東京)で、「明治初期の翻訳育児書」について発表した(日本医史学雑誌, 1987, 33, 90-92. [抄録])。これは、明治7, 8, 9年に翻訳・出版されたアメリカ、ドイツ、イギリスの育児書について、その原典、原著者、翻訳書、

および翻訳者についての調査・比較分析結果と、19世紀の西洋で母親向けの育児書が現れ、さらに1870年代後半から暫く、わが国でそれらの翻訳が盛んに行われた社会的背景について報告したものである。その後、学会発表時点では不明であった近藤鎮三(翻訳者の1人)の生年月日や肖像写真の所在も分かり、さらに分析も進んだので、そのうちにフル・ペーパーにする予定である。なお、これに関する調査・資料収集過程において、本学部の江藤恭二・篠田 弘両教授(教育史)からたびたび親切な教示を得たことに感謝する。そのほか、米独の図書館、本大学付属図書館員、日本司法博物館、近藤家を初め多くの機関・個人のお世話になった。また、近藤鎮三についてすでに研究発表されておられる方(加納正巳静岡県立大学教

授)や、研究を始めておられる方もあることが分かった。

1987年4月には、香港大学で開催された“Symposium on Social Values and Development of the Third World Countries”に招かれて、“The role of belief-value systems related to child-rearing and education: The case of early modern to modern Japan.”という論文を発表した。これは来年に Sage から現れる本 (*Social values and the development of third world countries: The Asian perspectives*) [仮題] の中の1つの章となる。

同年7月に東京で開かれた I S S B D (国際行動発達学会) 第9回大会では2つの発表をした。1つは“Life-span development of social relationships” (Chair: Michael Lewis) において“Sibling and peer relations in early childhood”という題目で、これまでのわれわれの共同研究の結果をもとにした理論的提起をした。これも将来、論文にまとめたいと思っている。もう1つは、ポスター・セッションに出したもの(青井教子と共同)で、昨年にこの欄で述べたわれわれの方法、LCS-Dを用いた研究である: “How do people represent their life course in retrospect and prospect?” これはサンプル数の少ない年齢群のデータを補充したうえで、論文にまとめる予定である。なお、この大会の前後に教室を訪れた4人の外国の研究者の参加を得て、講演やコロキウムを開催したり、共同研究の打ち合わせをした。

[児童発達観の研究] 上記の明治初期の翻訳育児書の研究も、児童発達観の歴史的研究の中に入る。そして、昨年から発表を始めた桑柏日記の分析の後半部が、この巻に掲載されている。そこにも記したように、それは筆者の分析の視点の大枠を提示したものであり、今後さら

にこの日記に取り組んで行くつもりである。いろいろの情報を提供して下さった渡部家の子孫の方々に心から感謝したい。

筆者がこれまで子どもの発達と家族生活の領域で、アマチュア歴史研究をしてきたのには、その問題に関する筆者の本質的興味に加えて、もう1つの狙いがある。それは、「発達に関心をもつ歴史家」と「歴史に関心のある発達研究者」とによるわが国での共同研究への準備である。そのための1つの道として筆者が考えているのは、われわれもアマチュア的でよいから史料に取り組んで、その視点から分析する意味を他の領域の研究者に問うことと、心理学研究者の歴史研究に対する潜在的興味を掘り起こすことである。筆者のこれまでの仕事は、この目標への接近に何かの寄与をしたかどうかの評価は、別に客観的になされる必要がある。また、目標の後半部に関しては、今秋の日本教育心理学会第29回総会(10月、東京)で、桑柏日記を読んだ経験をもとに発表する。

[家族関係など] 家族関係インヴェントリーの研究論文(小児科学の研究者との共著)が現れた(小児科, 1986, 27, 1327-1335)。また、「親に対する子どもに認知像の検査法——CCP解説——」の改訂版も現れた(林・一谷・小嶋, 1987, 大成出版牧野書房)。

その他、以前に予告しておいた論文, “Becoming nurturant in Japan: Past and present” (in A. Fogel & G. F. Melson (Eds.), *Origins of nurturance*. LEA, 1986) が出ているほか、「家庭と学校」の章(永田(編), 朝倉書店, 1987); 「家庭における対人関係」の章(大橋・長田(編), 有斐閣, 1987)などが現れ、「誕生からの3年間」の章(久世ほか著, 有斐閣, 1987)も間もなく現れる。

(1987年8月18日)

## 研究経過報告——昭和61年度

田 畑 治

### 1. カウンセリング過程の研究

この領域では1つの論文をまとめることができた。近年、外国文献では、心理療法に小動物(ペット)を媒介にさせた取り組みが発表されてきていることが散見されている。わが国でも、最近ちらほら発表されはじめている。筆者の研究では、心理療法やカウンセリングの過程

で、クライアントが偶然に話題として言及したことに、さりげなく注目していくなかで、小動物が非常に重要な役割を演じ、ひいてはクライアントおよびその家族の問題——親離れ・子離れ——が促進されたり、解決されたりすることを、2つの母親面接の事例をもとにまとめたものである。「心理療法における小動物のテーマの治療